

第三篇 滿洲中部及西部方面の状況

第一章 第三十軍の状況

第一節 第三十軍全般の状況

第一 昭和二十年六月十五日軍司令官、師團長会同の際

指示せられたる關東軍作戦計畫（第三方面軍關係

のみ）の要旨

一、敵情判断

1. 近く豫想せらるる米軍の日本本土上陸或は南朝鮮上陸に呼應し蘇軍は滿洲に進攻を開始すべし。

2. 進攻の時機は嚴冬前とし早くも九月以降をすべし。

二、作戦方針

滿蒙国境より連京線に到る縦長の地域により進入する蘇軍の戦力を消耗せしむると共に連京線（含む）以東に於て豫め準備せる陣地を
利用し敵を撃破す。

0009

三、作戰要領

1. 第四十四軍及第百八師團（第三方面軍直轄として錦熱地方の防衛に任しあり）は決戦を避けて敵の戦力消耗及前進遲滞に勉む。敵濫過東進するも其の後方に殘留し後方より敵を攻撃して其の戦力消耗に勉む。

2. 第三十軍は左記要領により陣地を利用し敵を撃破す。

左記（附圖第一参照）

第一線（前進陣地）

連京線沿線主要都市

特に確保すべき要點は新京及奉天市とす

第二線（中間陣地）

イ海龍、山城鎮、清原附近吉奉線西側高地の線

ロ本溪湖、鳳凰城、安東附近安奉線沿線地區

第三線（主陣地帯）

0010

金川、柳河、興京、桓仁の線

3. 第三十軍^と第四十四軍との作戰地境は連京線とし線上は第三十軍とす

4. 都市防禦

滿洲國政府指導の下に国内主要都市を防禦據點化し軍民一體となり蘇軍の侵攻を縦長の地域に阻止す

四 關東軍作戰計畫に對する第三方面軍司令官後宮大將の意見

通化地區に後退して決戦をする關東軍作戰計畫には全く反對の意見にして、其の理由とせるところは第三方面軍管區内の日本人居留民は現在約百万を算し其の大部は連京線沿線地區に居住しあり。然るに通化地區に於ける^{居住}住施設は皆無といふも過言ならずして軍自体の築城、彈藥、糧秣の集積等も之より開始せんとする時居留民の爲の居住準備、糧秣の集積等は年内には不可能なり。又通化地區冬季の氣温は齊々哈爾と全く同じく之が越冬は居住施設なくしては不可

能なり。即ち關東軍作戰計畫は百十万人の居留民を放棄して作戰を續
行せんとするものにして方面軍司令官としては斯の如き方策は採り
得ず。

従つて方面軍は飽く迄居留民と生死を共し連京線沿線地區を最後の
決戦場とするを要すと謂ふに在り。

後官方面軍司令官は右理由による連京線沿線地區決戦に就きては平
固たる決心を有したるが如く、八月八日（開戦前日）第三十軍司令
官飯田祥二郎中將の延吉赴任に際し「私は奉天を死守しませぬ貴方は
新京を死守して下さい」と幾々と語りたり。

第二 第三十軍の作戰準備

一 第三十軍司令部の編成

第三十軍司令部は關東軍の作戰計畫上掲記せられありたるも人裏上
の關係により其の編成遅れ、當初の作戰準備は主として第三方面軍
司令部に於て擔任せり。

0012

七月三十一日第三十軍司令部は間島省延吉に於て編成せらる（編成
擔任官第三軍司令官中將村上啓作）。

軍司令官中將飯田祥二郎、軍參謀長少將加藤道雄にして、高級參謀大
佐吉川猛は八月八日（開戦の前日）延吉に著任せり。

尙作戰主任參謀中佐桑正彦は病氣の爲六月以來奉天に於て臥床、後
方主任參謀少佐廣瀬鶴^{シキキ}信は海拉爾にありて著任しめらず、情報主任
參謀は未發令（十日關東軍參謀少佐山岸武第三十軍參謀として著任
す）の狀況なりき。

二陣地の構築

ノ開戦迄に陣地偵察を實施せる地區左の如し。

左記

第一線（前進陣地帯） 奉天及四平附近

第二線（中間陣地帯） 撫順、本溪^湖及安東附近

第三線（主陣地帯） 金川及柳河附近

2. 開戦迄に工事を開始せるものは安東のみにして其の他は工事に任
ずる兵團が編成未完か、或は支那方面より未著のため工事を開始
しあらず。

3. 築城材料は關東軍建設團に於て準備中なりしも隨處迄に豫定陣地
に到着しあらず。

4. 勞務者の一部は已に徵用しありしも工事基幹部隊未著の爲豫定陣
地には配備しあらず。

5. 支那方面より轉進せる部隊の態勢落著きたると一部の兵團新設せ
られしを以て、八月八日を第一日とし約一週間の豫定を以て奉天
に於て陣地の編成工事の要領につき方面軍の集合教育行はる（但
し九日開戦と同時に解散す）。

6. 都市防禦

都市防禦に關しては昭和二十年初頭より關東軍に於て計畫しあり
しも、實際に現地の市、街長に傳達せられしは奉天省に於て八月

三日頃なり。然れども未だ滿洲國實民の空氣は軍の意圖するのと
と相距ること遠きものありて、市、街長の態度は非協力的なりき。

三、第三十軍作戦準備は十一月上旬を概成目標とせり。

右は最大限の努力目標にして實際には困難なりき。

四、七月末下令されたる第三十軍戦闘序列次の如し

軍司令官 中將 飯田 祥二郎

第三十軍司令部

第三十九師團

第二百二十五師團

第三百三十八師團

第四百四十八師團

獨立野戦重砲兵第二十一大隊

獨立白砲第二十七大隊

重砲兵第一聯隊

0015

重砲兵第十九聯隊

獨立重砲兵第七大隊

第二工兵隊司令部

獨立工兵第四十大隊

特設警備大隊 二

特設警備中隊 一

自動車大隊 一

輜重兵大隊 一

道路隊 一

第三 開戦時に於ける第三十軍の状況

第三十軍司令部

延吉に在り。蘇軍の侵攻開始に伴ひ九日晝軍司令官中將飯田祥二郎は軍參謀長及高級參謀と共に飛行機により梅河口に前進し、高級參謀は更に方面軍司令部に連絡のため奉天に到れり。

司令部は九日夕延吉出發鐵道により梅河口に前進を開始す。作戰主任參謀は奉天方面軍司令部に在り。

三 第三十九師團

師團司令部は海龍に在り。

師團主力は海龍、東豐、西安の地區に集結しあり。

中支より轉進し來れる精銳兵團なるも輸送圓滑を欠き師團砲兵到着しあらず。

三 第二百二十五師團

師團司令部は通化に在り。

師團主力は通化及柳河の地區に集結しあり。開戦と同時に關東軍直轄となりたるも第三十軍司令官の之を知りしは十一日なり。

四 第二百三十八師團

師團司令部は撫順に在り。主力は撫順、南雜木の地區にあり。尙編成未完にして兵力約二、〇〇〇なり。

開戦と同時に方面軍直轄となる。

五、第四百十八師團

八月三日編成を完結す。

師團司令部及師團主力は新京附近に集結しあり。歩兵聯隊は殆ど小銃を裝備しあらず野砲兵聯隊は十榴一門三八野砲一門のみなり。

六、獨立野戦重砲兵第二十一大隊

獨立臼砲第二十七大隊

重砲兵第一聯隊

重砲兵第十九聯隊

獨立重砲兵第七大隊

以上は通化地區に在り。

七、第二工兵隊司令部

獨立工兵第四十大隊

以上は中支より奉天到着（七月中旬）と同時に方面軍直轄となり方

備軍全隊の築城施設の指導に任しあり。

八 特設警備大隊 三

特設警備中隊 二

自動車大隊 一

輜重兵大隊 一

道路隊 一

以上の部隊は終戦に至る迄之を掌握するを得さりき。

第四 作 戦 経 過

一 梅河口に於ける第三十軍司令部

ノ十日軍戦闘司令部を梅河口驛前梅の屋ホテルに開設す。

二 十日朝、高級参謀及作戦主任参謀奉天第三方面軍司令部出發に方り

方面軍より受けたる命令の要旨次の如し。

イ 第三方面軍正面敵機甲部隊は敵縱隊となり國境を突破して東進
中にして早ければ十三日頃遼京線沿地風に進出すへし

0019

東部國境に於ては九日己に國境陣地を突破せられ敵は綏陽、渾春に進出す一部の敵機甲部隊は牡丹江に向ひ突進中其他全面的に敵は國境を突破侵入せるも通信杜絶しあるため狀況不明なり

- ロ 方面軍は既定計畫に基き作戰行動を開始す
- ハ 第三十軍は先づ新京四平地區を確保し進攻する敵を撃破すへし
- 3. 右に基き十日夕梅河口に集合せる各兵團命令を下達す。

左 記

- イ 軍は新京及四平を確保し進攻する敵を撃破せんとなす
- ロ 第四百十八師團は新京特別市を確保し進攻する敵を撃破すへし
- ハ 第三十九師團は四平に前進し四平東側高地帯を確保し進攻する敵を撃破すへし
- ニ 第二百二十五師團は梅河口周邊地區に前進し爾後の行動を準備す

(以下省略す)

4. 軍は軍通信機關を有せず當時公衆電話も通せざりしを以て十一日夕迄敵情も方面軍の企圖も判明せず止むを得ず十一日朝情報主任參謀少佐山岸武を通化關東軍司令部へ參謀部付中尉大西富二を奉天方面軍司令部に連絡のため派遣せり。

5. 十一日夜奉天方面軍司令部より公衆電話により開戦以來の方面軍命令を取纏め下達せられしも混線甚しく意志通せず、唯第百二十五師團が關東軍直轄となりたることと及第三十軍司令部は速かに新京に進出すべきことのみ諒解す。

6. 右により第三十軍は全力を新京に集結し決戦をなすへき案に変更せられたるものと判断し、在四平第三十九師團に新京に向ひ轉進を命ず。

7. 十二日早朝軍司令官軍參謀長高級參謀^某作戰主任參謀は東豐飛行場に前進し折から疎開輸送中の第二航空軍司令部の飛行機に便乗し新京に前進す。

8. 當時軍司令部主力は吉林附近鐵燄による列車遲延の爲末た梅河口
に到着しあらず。

二 新京に於ける第三十軍司令部

1. 十二日晝新京飛行場に到着す。折から通化に後退すへき關東軍總
司令官山田大將飛行場に到着し、新京附近の關東軍直轄部隊を悉
皆指揮下に入らしめられ新京特別市の防衛を命ぜらる。

2. 十二日晝第三十軍戰鬥司令部所を關東軍總司令部廳舎に開設し左記
部隊を掌握す

左記

イ 獨立混成第百三十三旅團

ロ 戰車第三十五聯隊

ハ 新京高射砲隊

ニ 高射砲第二十六聯隊

ホ 禁衛團

0022

滿洲國軍官學校生徒隊

3. 新京軍戦闘司令部に於て第三方面軍司令部との連絡成り、左記要旨の命令を受く

左記

イ 方面軍は連京線沿線地區に於て敵を撃破す

ロ 第三十軍は新京及四平を確保し來攻する敵を撃破すへし

ハ 新に第百七師團（五叉溝）及第百十七師團（洮南）を軍の指揮

下に入らしめ第四十四軍との作戰地境を左の如く變更す

ニ 連京線（線上は第三十軍）

新 昌圖―鄭家屯―魯北（線上は第四十四軍）

ハ右により急遽第三十九師團に對し新京に向ふ輸送を中止せしめ再

度四平東側高地を占領せしむ。然れども歩兵第二百三十一聯隊は

已に新京に到着しありしを以て軍豫備隊として新京に控置す。

ホ 第百七師團は五叉溝既設陣地に於て優勢なる敵の包圍を受けて交

戦中なるものの如く、又第百十七師團は洮南附近を撤退し鐵道及徒歩行軍により新京に向ひ後退中なり。

然れども軍は通信機關を有せざりしを以て之等師團とは終戦後始めて連絡するを得たり。

6. 十三日朝新京特別市防禦に關する左記要旨の軍命令を下達す。

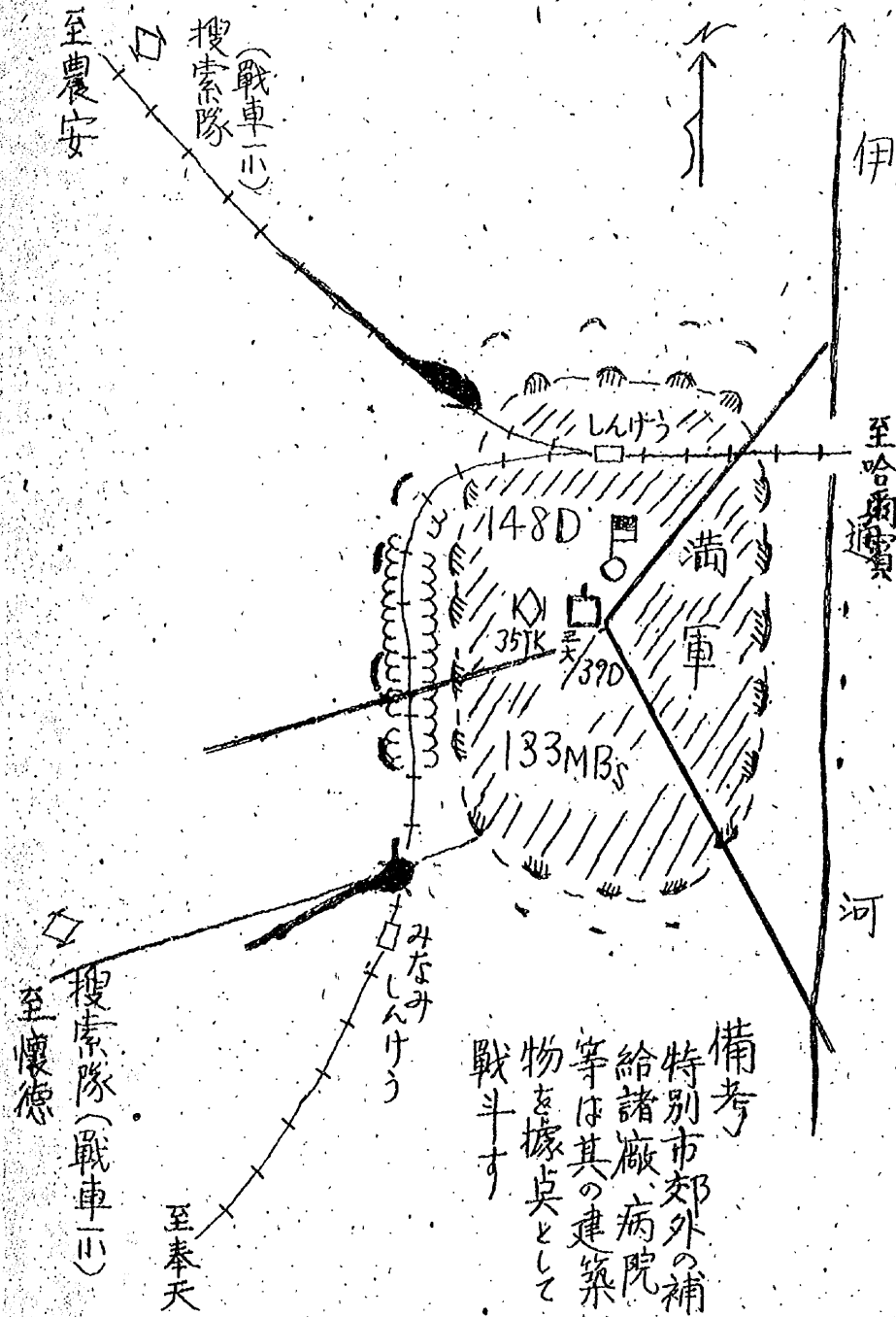
左記

1. 敵の前進速度は逐次低調となり新京特別市正面に現出するは早くも十五日頃なるへし

口軍は主力を以て新京特別市を確保し來攻する敵を撃破せんとすハ部署の概要要圖の如し

0024

新京防禦配備要圖 (於八月十三日)



0025

7. 十三日夕より各部隊は逐次陣地に就き工事を開始す。

8. 十四日西正面の敵機甲部隊は燃料の補給匱乏を欠き加ふるに雨天のため難行中にして、新京特別市正面に現出するは十五日以降となるへき情報を受く。

9. 十四日伊通河正面にありし滿洲國軍背叛し新京市内各所に於て小戦惹起す。

三 滿洲國軍の背叛と終戦

10. 十三日新京防禦に關する軍命令に基き禁衛團地區の配備變更を滿洲國軍に對する武装解除と誤斷せるに端を發し十四日以來新京城内の日滿軍衝突するに到れり。

當初は禁衛團と第四百四十八師團の第一線との衝突なりしも、軍官學校内日滿系軍官との衝突となり十五日は城内を中心とする地區と其の他の地區とは劇然と敵味方として對峙するに到り十九日頃迄新京市内は銃聲の絶ゆることなく戰然たり。

二十五日終戦と同時に満系市民の掠奪行為開始され補給諸廠、兵營、
官舎地帯は彼等の執拗なる襲撃を受くるに到れり。

十四日十四時頃奉天方面軍司令部末弘參謀より電話により「大命に
よつて愈々停戦となつた細部は一任するから新京の方は宜敷く頼ん
だぞ」との連絡あり。當日朝已に關東軍第二課野原參謀より日本政
府が降伏受諾の放送をなしあることを秘かに教へられありたるを以
て直ちに新京の各部隊に停戦命令を下達せり。

十四日夕刻通化より關東軍司令部官山田大將以下總司令部幕僚は新京
に歸還し、關東軍に於ては停戦命令を發令しあらざるにより即刻作
戦行動再開を命せられ止むを得ず作戦行動再開の命令を下達せるも
各部隊の統制を回復すること困難の裡に十五日終戦の大詔を迎ふる
に至れり。

五 公主嶺に轉進

八月十五日終戦となりたる當時約三萬人の在新京、兵力の武装解除

を如何にするかを討議したる結果蘇軍との摩擦を最小限にするため主要兵器は自主的に新京南側郊外孟家屯兵器廠に集積主力を新京より公主嶺に轉進集結せしむるに決し第四百四十八師團主力を新京に殘置し其の他の主力は十八日朝より公主嶺に轉進を開始せり。

2 十九日夜敵機甲部隊の先頭連京線上范家屯（新京南二十料）に遷し當時公主嶺に向ひ轉進中の部隊と交戦するに至り第三十九師團歩兵第二三一聯隊の主力は武装解除を受け懷德に拉致さる

3 第三十軍司令部は十九日夜公主嶺に到着す

六 武装解除

1 八月十九日蘇軍便（ザバイカル方面軍作戰課長大佐某以下數名）は輸送機に搭乗し約十五機の戦闘機に掩護せられ新京飛行場に到着す。

2 關東軍總司令部代表少將松村知勝、新京駐屯日本軍代表中佐桑正彦は飛行場にて軍便と會見す。

其の結果、關東軍總司令部の武装解除は暫時保留され、在新京部隊は
即刻新京南側郊外に集結して武装解除を命ぜらる。

3. 新京駐屯地司令官第四百四十八師團長末光中將は、在新京部隊を新京
特別市南側建國大學、大同學院、工業大學、高等警察學校、關東
軍通信隊兵舎に集結せしめ、武器彈藥を孟家屯兵器廠にて蘇軍側
に引き渡したり。

孟家屯兵器廠に於て蘇軍に引き渡したる主要兵器は野砲一門、十
榴一門、高射砲十數門、戰車五輛、小銃、銃劍、歩兵砲、機關銃
相當數なり。

4. 公主嶺、四平所在部隊は二十日武装解除を受けたり。

七、第四百十七師團の状況

開戦と同時に鎮東、白城子、洮南、開通等、洮線沿線の主要部落を
據點として敵の來攻に備へありしが十一日、新京に後退して第三十
軍司令官の指揮下に、入るべき一命令を受け、白城子、洮南等は火を放

つて行軍及鐵道により轉進を開始す。

師團は大賚及其西方地區に於て終戦を知り師團長は十六日先行して新京に到り兵力を公主嶺に集結すべく處置せるも蘇軍の到着と共に一部の兵力は移動を停止せられ新京及公主嶺の兩地に於て武装を解除せられたり。

八 第百七師團の狀況

（註）終戦後判明せる狀況なり。

師團は八月十日第四十四軍より「新京に到り第三十軍司令官の指揮下に入るべき」命令を受け、數梯團となり轉進を開始し白阿線に沿ふ地區を後退中數次に亘り蘇軍機甲部隊の攻撃を受け又鮮人兵の逃亡續出の爲師團は兵力順に減少して數團に分散して戦闘しつつ行動し、八月二十七日札賚特旗音德爾（王爺廟北々東百軒）に達し該地に於て蘇軍に依り武装解除せられたり。

師團は十一日以後無線機故障の爲上級司令部との連絡を絶ちありし

0030

爲終戦後、東軍及第三十軍に於ては、幕僚を飛行機に依り派遣し、漸く師團の位置判明し之と連絡するを得たり。

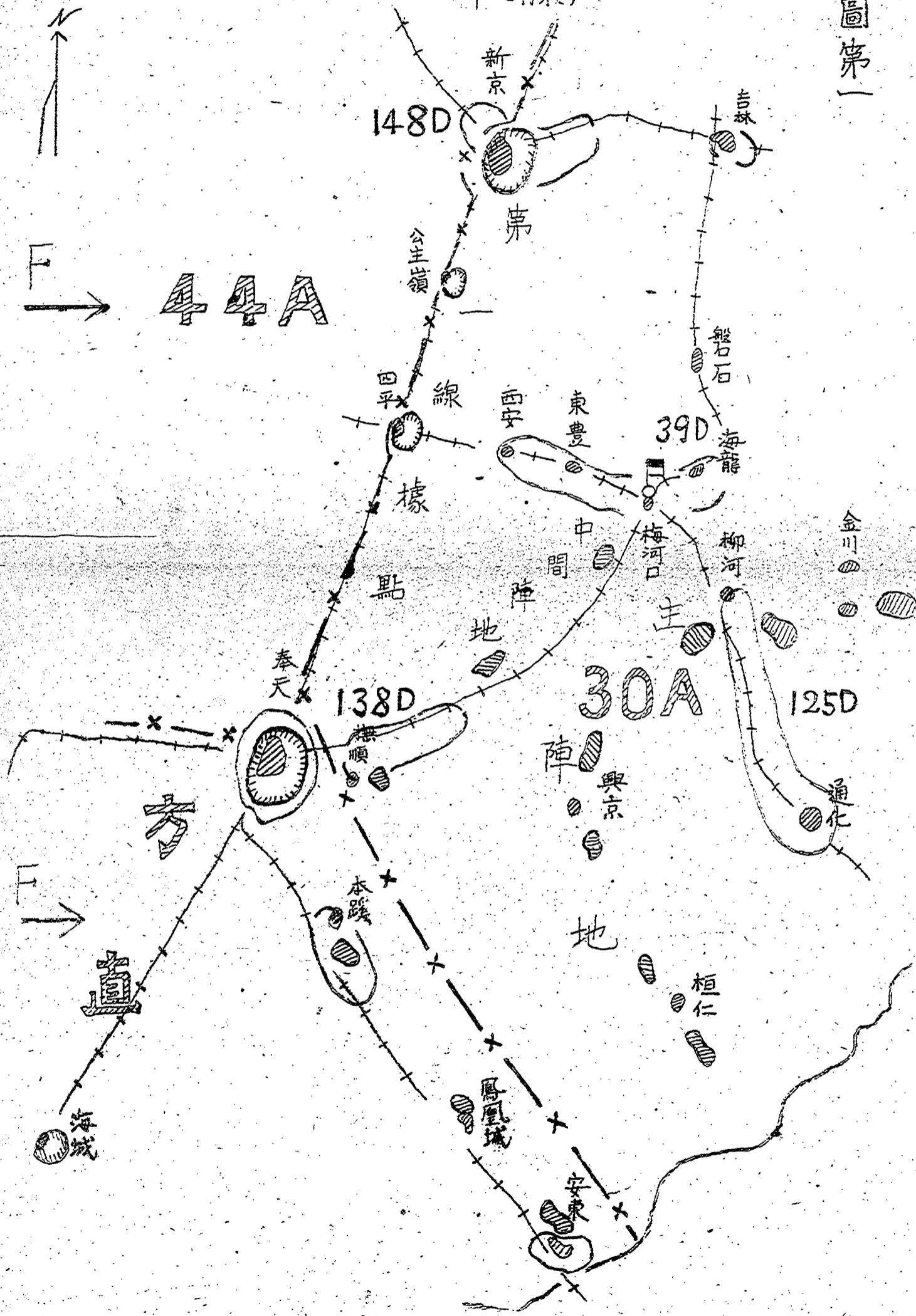
三三

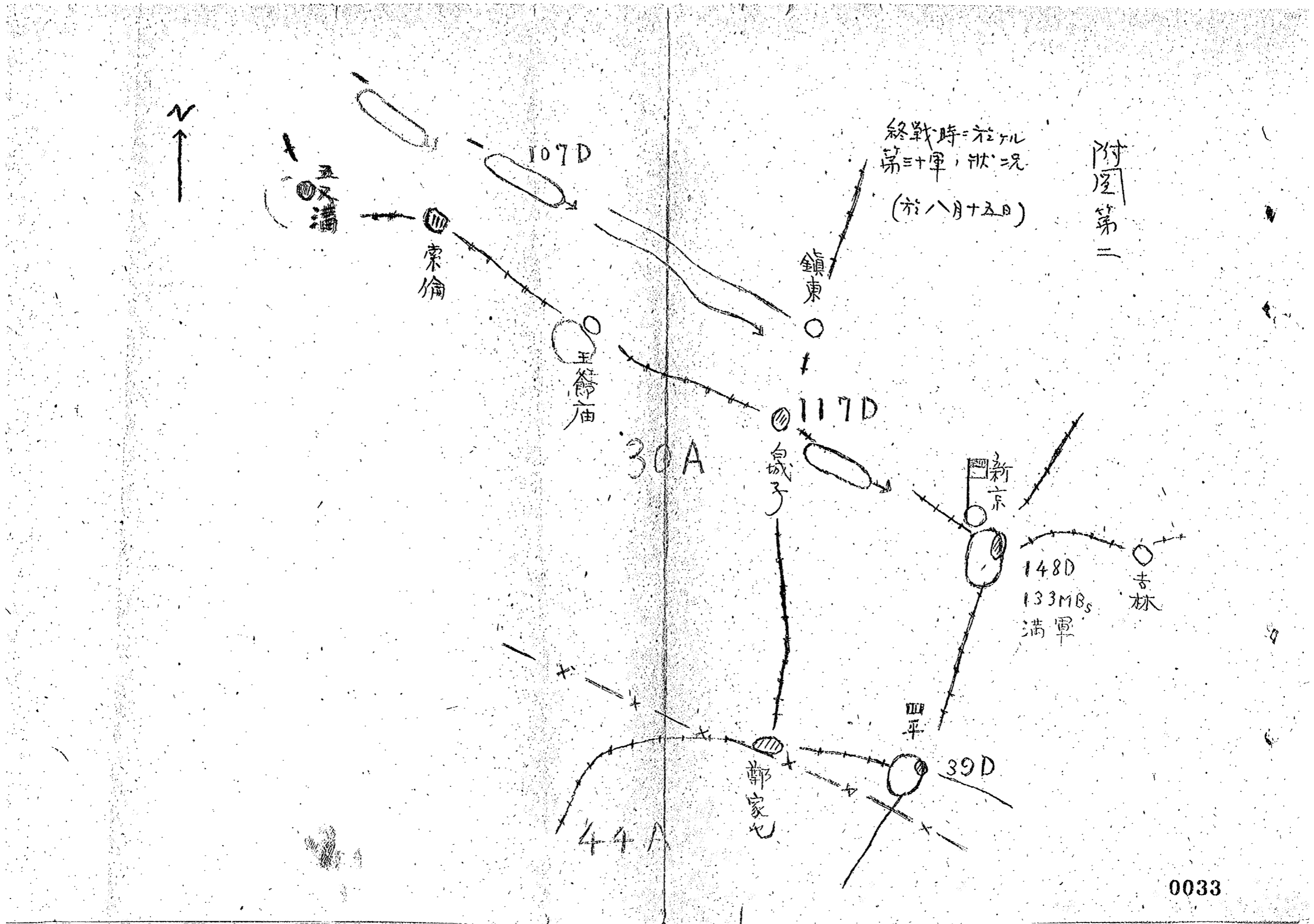
0031

第三十軍陣地配置計畫要圖
(昭和二十年七月末)

附圖第一

0032





0033

第二節 第三十九師團の状況

第一 中支より滿洲への轉進及海龍周邊に於ける配備完了迄
の轉進状況

本師團は五月上旬應城周邊に集結を完了し五月十二日五箇梯團を以て考成を出發、京漢線に沿ひ開封に向ひ前進す。砲兵部隊の全火砲及輜重部隊の輜重車約半數は汽車輸送によりたり。一馬匹を漢口に殘置せしめられたるに依る。但し不足馬匹は新郷に於て補充せられたり。

六月初旬頃より逐次開封に集結を完了し到着部隊より汽車輸送にて滿洲に向ひ六月中旬頃より海龍周邊、四平、公主嶺、開源、西安に到着し概ね七月初旬を以て輸送を終了す。

又第三方面軍司令官の命により參謀は五月十二日應城出發、自動車にて奉天に向ひ北上を開始し師團長は同月二十日頃空路北上し夫々五月二十四日、五日頃第三方面軍司令部に到着し直に海龍周邊

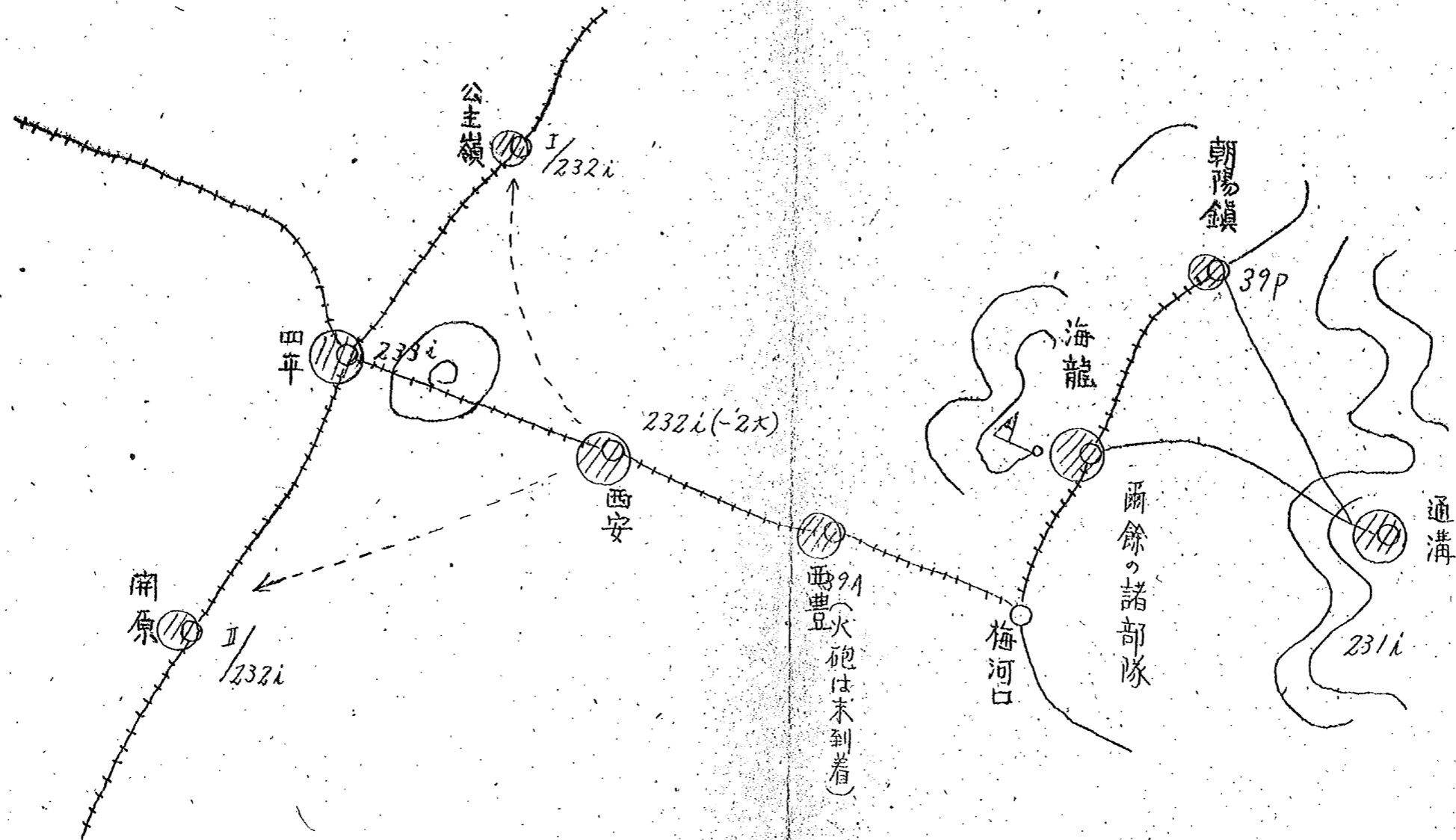
の地形を偵察す。其の結果海龍附近の陣地編成は困難にして通溝
附近に後退すべきを具申す。

3. 師團は第三方面軍司令官の直轄部隊として左記第一圖の如く配備
す。

0035

第三十九師團配備要圖 (至南戰迄)

第一圖



0036

第三 對蘇作戰實行期の狀況

一 蘇聯參戰直前の狀況

ノ 師團の戦力

イ 砲兵部隊の火炮は全部支那より追及しあらず

ロ 輜重部隊の自動車及輜重車の半数追及しあらず

ハ 彈藥は携行彈藥のみにて補給を受けあらず

ニ 築城材料支給の命は受けたるも未受領

ホ 對支作戰のみに經驗を有し優良裝備の敵に對する訓練は不充分なり

二 蘇聯參戰當時の狀況

師團長は八月九日朝通溝附近の陣地偵察中蘇聯開戦のニュースを宿舎のラヂオにて承知し直に師團司令部に向ひ歸還す。途中朝陽鎮にて正午頃左の要旨の第三方面軍命令を受領す。

ハ 方面軍は敵を連京線一帶に邀撃せんとす

ロ 第三十九師團は一部を新京に派遣し該地區防衛司令官の指揮下に

入らしめ主力を以て四平一部を以て公主嶺、開源京に位置し敵を邀撃すべし

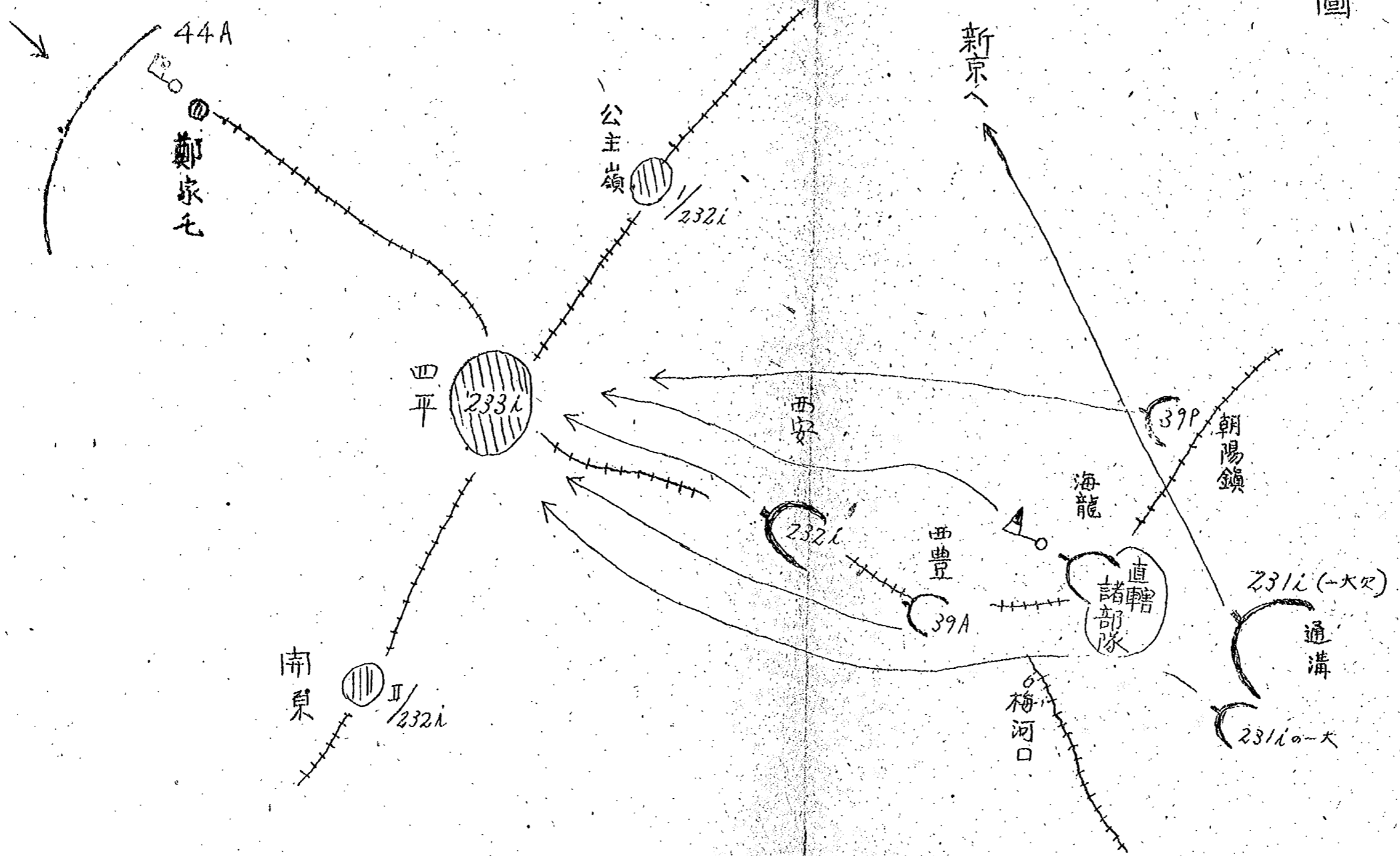
(一) 自今第三十軍司令官の指揮下に復歸すべし

右軍命令に基き直に左記第二圖の如く諸隊に集中を命ず。

0038

第三十九師團集中部署要圖

第二圖



0039

戦後の行動経過

八月十日〇七、〇〇頃左の要旨の軍命令に接す。

「第三十九師團は行動を停止し現態勢にて後命を待つべし」

師團長は軍企圖の變更を察知し參謀を軍司令部に派遣す。參謀は軍參謀長より大要左の如き情況を承知し司令部に歸還す

「關東軍總司令官の意圖は白頭山系に於て防勢を採るにあるもの如し、然るに連京線沿線地區に邀撃せんとするは方面軍司令官の獨斷に出でたるもの如く軍は取り敢えず隸下兵團の行動を現態勢に停止せしめ方面軍司令官の意圖を再確認せんとするものなり」

依つて師團は各部隊の行動を停止せしむ。

2 次いで十日一二、〇〇頃左の要旨の第三十軍命令を受領す。

「軍は主力を以て新京防衛に任ずると共に連京線沿線地區に於て果敢なる遊撃戰を企圖す

口第三十九師團は新京に向ひ前進すべし

二八

各一部を以て公主嶺、四平、開原周邊に於て敵を遊撃すべし

○自今余は新京に位置す

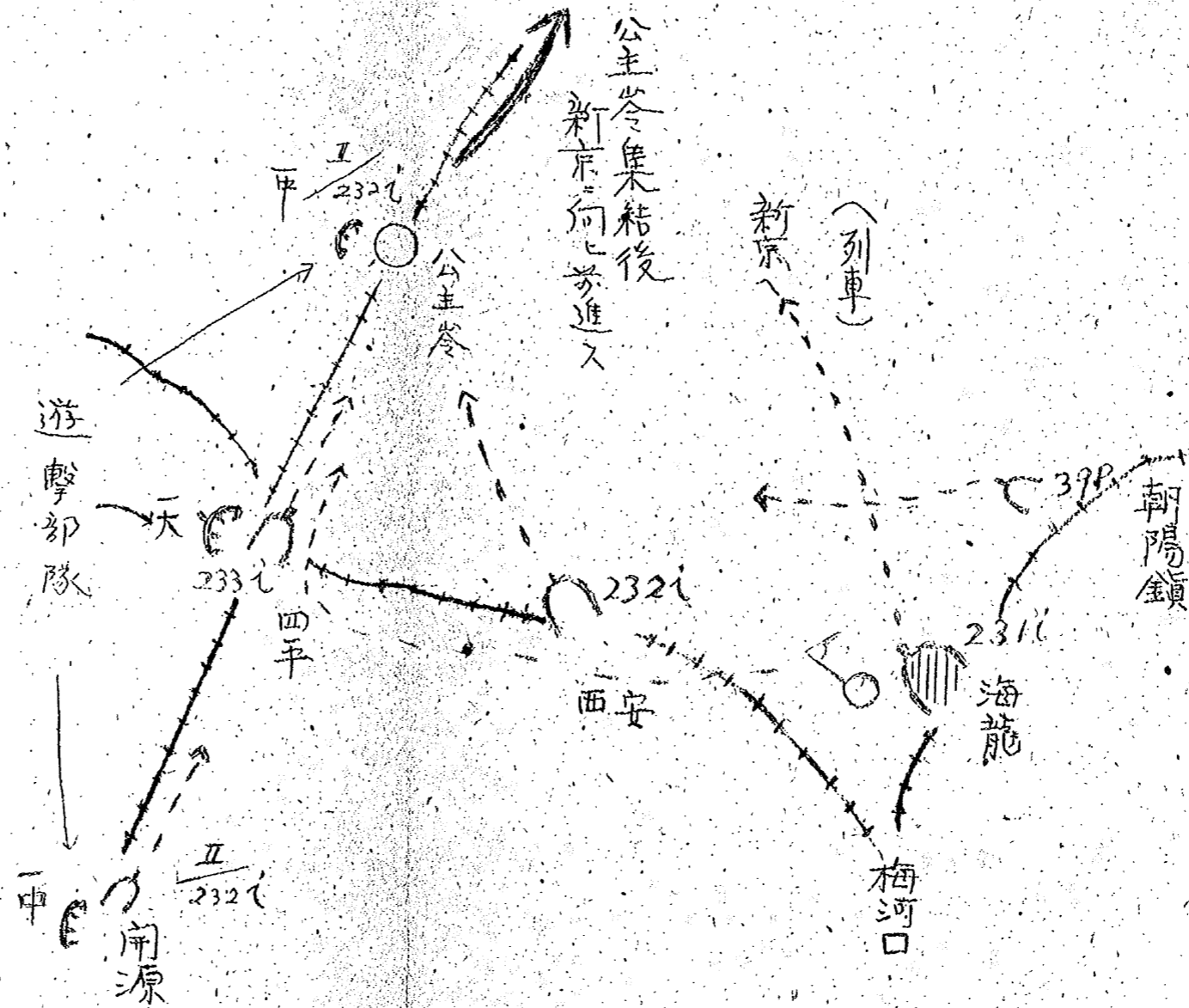
師團長は列車輸送の至難を顧慮し²³¹¹のみ汽車輸送に依り新京に向はしめ、爾余の主力は行軍を以て公主嶺に集結し新京に向ひ前進すべく決す。之が爲參謀を西安、四平に急派し兵力集結を指導せしむ。

師團の新京に向ふ兵力部署の要旨は左記第三圖の如し。

0041

師團兵力部署要旨圖(八月十日 十四時頃)

第三圖



0042

先遣參謀は十日夕刻西安(2321の位置)に到着し(2322)は既に一日行程四平に向ひ前進しありたるも先の停止命令に依り聯隊長は獨斷西案に向ひ逆行しつゝある状況を知る(聯隊長は停止命令に依り状況の變化を察し師團は海龍附近に集結するものと判断せり)。依つて參謀は西安驛長と協議し石炭輸送列車を軍除輸送用を使用するに決し、西安副縣長は荷車五〇〇台を準備し(2321)長の指揮下に入らしめ、西安驛長は部下を督勵して石炭の卸下を強行す。副縣長及西安驛長の獻身的活躍は將兵を深く感激せしめたり。

次いで先遣參謀は十一日一〇、〇〇頃四平着。正午過停車場司令官より第三十九師(師)主力は四平に停止すべき旨通報あり。軍司令部との連絡困難なりしを以て方面軍司令部に連絡し之を確認す。依つて左の如く處置せり。

(一) 2311 は一大隊を四平に殘置し主力は新京に向ひ前進せしむ(同日夕刻四平發)

□ 2321 は四平にて下車

□ 2321 の女兵は公主嶺、開原に位置し遊撃準備

□ 2338 は四平後方山系に陣地構築及遊撃準備

師團長に報告（翌朝四平到着迄報告通達せず）
同日夕刻派遣参謀は四平省公署に於て四平省次長と會見し左の如く協定す。

（）省は全面的に師團の指示に基き行動す

□ 省は取り敢えず左の處置を爲す

イ 糧秣の確保及之が輸送

ロ 陣地構築作業隊の編成（四平省土木局長指揮五〇〇〇名編成）

ハ 作井隊の編成

ニ 遼河と連京線の間地区に於て交通網の遮断準備（橋梁等の破壊準備）

準備

ホ 輸送部隊（馬車一五、〇〇〇台）の編成

警察部長は遼河の線に出て情報収集並に遊撃戦展開

本省に於て情報収集の組織化

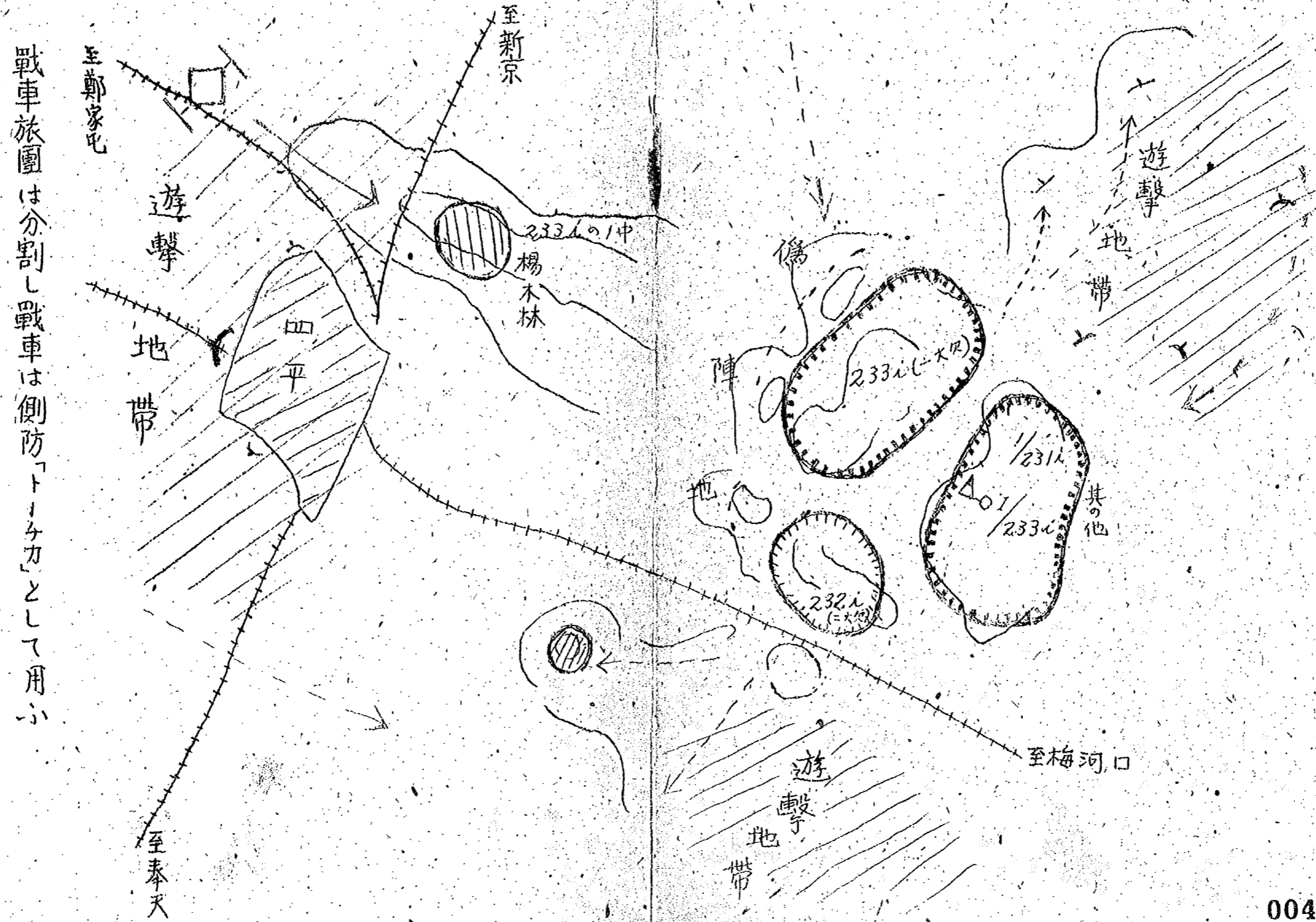
省次長は今や滿洲國官吏にあらず日本軍の一員として献身する旨を嚴肅に誓約し特に糧秣確保、集結及一隻輸送は全責任を負ふ旨を申出でたり。尙省次長より鄭家屯の軍司令部（第四十四軍）は既に奉天に後退せる由を承知す。

3. 八月十二日朝師團長は四平に到着し各團隊長を集合せしめ第四團の如く陣地を四平東方山地帯に編成すべき旨を示し、夫々陣地（地形）を偵察せしめ又鄭家屯遼河の橋梁破壊を準備す。

軍命令に依り在四平諸部隊を指揮す。戦闘部隊としては戦車旅團一他は後方諸部隊にして指揮單位二十數部隊なり（師團各部隊を除く）。

四平東方山地帯に於ける第三十九師團陣地編成要圖

第四圖



戦車旅團は分割し戦車は側防「ト」字カとして用ふ

0046

八月十三日鄭家屯鐵道橋梁を爆破す。第一回滿鐵に依る破壊は不十分にして30pを以て再度爆破す。

八月十四日遼河運京線中間地區交通遮斷の爆破準備を完了せる旨省より連絡あり（停戦に依り遂に實施せず）

八月十四日四平飛行場に我飛行機二十數機到着し白城子附近の敵機甲部隊を攻撃す。

第三、終戦時の状況

八月十五日停戦の放送に接し左の師團命令を發す。

一師團は軍の正式命令ある迄戦闘行動を續行す

師團長は自今居留民の保護に萬全を期すべき意圖を明示し左の如く處置す。

(一) 西安、西豊に夫々歩兵一個中隊を派遣す

(二) 各部隊に現地居留民の保護を重視すべく命ず

(三) 四平に於ては小哨及巡察を強化し状況に依り將校を主体とし數

名宛民家直接宿泊警戒をなさしむ

三三

2 八月十六日參謀を第三十軍司令部に出頭せしめ軍旗奉焼、及武器交付、部隊集結に關する命令を受領し即日歸還す。

3 蘇軍進駐前日(八月二十三日)蘇軍は鄭家屯方向より東進中の情報逐次到着しありしが四平郊外に到着せる日軍旗奉焼の命令を發し、之が訓示を爲す。一般居留民各種團隊の集合せるもの多數あり。訓示終了後四平郊外楊林^{木林}に於て歩兵第二百三十二聯隊及歩兵第二三三聯隊軍旗を師團長立會の下に各聯隊長奉焼す。

4 蘇軍進駐第一日(八月二十四日)

蘇聯機械化部隊約五〇〇(但し車輛は鄭家屯橋梁破壊の爲殘置しあり)は前夜四平郊外に達す。依つて師團は軍使を派遣せるに三時間内に四平部隊一切の武器彈藥の交付を要求し其の不可能なる場合は明朝より攻撃を開始する旨を述べたるを以てその旨を答ふ。翌朝直指揮官たる中佐司令部に出頭したる

0048

て武器交付の爲最少限二日を要す旨を述べれば其の必要なし、一週列車を準備すべきを要求し、同日夕刻列車にて奉天方向に南下せり。

5. 蘇軍進駐第二日（八月二十五日）

公主嶺方面より早朝蘇軍部隊列車にて到着四平に下車す。兵力約一〇〇〇名にして戦車、装甲車各十数輛、自動車約二〇輛を有し此日四平に宿營す。四平飛行場に軍使到着す。蘇軍航空兵大佐及少佐なり。依つて四平市廳にて之と會見し左の如く協定す。

→ 治安維持の爲日本軍は當分四平市内に駐在し携帯兵器として機關銃以下の兵器を所有し得其の數は明日四平の情況視察の上蘇軍に於て決定す

□ 進駐蘇軍の軍紀維持に關しては蘇軍に於て責任を以て任ず

⇒ 兵器彈藥は明日以後速かに四平飛行場に集結交付すること

（二日間の協定）

四四平警備隊長として蘇軍大尉を任命し、治安維持に關しては警備隊長と交渉すること、警備隊長は本夜日本軍參謀と同車し治安維持の爲市内を巡回すること、(實施せるも特別の非行を發見し得ず略々平穩なり)

夜半四平飛行場に蘇軍中將(師團長?)及幕僚到着し直に日本軍師團長宿舍に來り左の如く要求す。

(一)武器彈藥一切を明日四平飛行場に集結交付すべきこと

(二)在四平部隊及開原、西豐、西安部隊を集結し移動を許さず

(三)居留民の保護に關しては蘇軍に於て其の實に任ず但し師團司令

部は若干の兵器の拂帶を認む

幾に蘇軍航空兵大佐と協定せる事項は全然價値を有せざりき。

6. 蘇軍進駐第三日(八月二十六日)

四平飛行場に於ける武器彈藥の集積は豫定の如く進捗せず。

7. 蘇軍進駐第五日(八月二十八日)

武器彈藥の交付を終了す。

8. 師團長は關東軍將官會議出席の爲四平を出發す(蘇軍よりの指示)

8. 蘇軍進駐第六日(八月二十九日)
戦車及飛行機(練習機程度)を爆破す。

車輛兵器類は逐次列車にて新京方面に輸送を開始す。

9. 蘇軍進駐第七日(八月三十日)

蘇軍軍司令官中將四平飛行場に到着し爾後の折衝は蘇軍參謀長
(ソコロフ大佐)と行ふことゝなれり。蘇側より日本軍は師團司
令部を除き他は一切楊木林に集結すべく要求す。

10. 蘇軍進駐第八乃至第十日(八月三十一日―九月二日)

各部隊の楊木林集結を實施す。

11. 蘇軍進駐第十二日十三日(九月四日、五日)

作業隊の編成を要求せられ鐵道復舊を名として逐次新京方向へ輸
送せらる。隊長は大尉若しくは少佐とし兵員約一三〇〇―一五〇

0051

○名を以て一隊を編成す。再三の交渉に依り大佐も長として出發
を得ることとなれり。四平より編成せる作業隊は總數十六隊なり。
12 十月中旬

將校殘餘（約六〇〇名）は新京に向ふ。四平に殘留せる部隊は病
院關係のみなり。

五歩兵第二三一聯隊の戰鬪

新京に派遣せる²³¹¹（長福永大佐）は八月十九日夕新京發列車にて公
主嶺に向ふ。夜半公主嶺新京中間地區に於て不意に機關砲の射撃を
受け機關車破壊す。聯隊長は陸軍の叛亂部隊と判斷し之と交戦す
（新京に於て滿軍の叛亂せるを以てなり）。拂曉前蘇軍なることを
知り、軍旗を奉焼したる後戰鬪を停止す。我損害十數名なり。聯隊
長及將校數名は直に拉置せられ八面通方面に向ひたるもの、如く、
部隊は公主嶺に到着せり（脱出せる下士官の報告に依る）。

第四 其他の狀況

0052

1. 四平省公署の情況

省災長以下獻身的奮闘は前述せる如く特筆すべきものありたり。
四平省長は停戦後四平市内に潜伏し、居留民保護の爲活躍を依頼
せるも應ぜず、郷里に身を潛めたり。

2. 居留民の狀況

停戦と同時に四平に避難民殺到し民心極めて動搖せる^期に右往左
往せるを以て滿人に依る迫害相當ありたる模様なるも四平市内は
極めて平靜なり。鮮人は滿人の恨みを相當受けありし爲か相當迫
害せられたる模様なり。

3. 滿人の動向

動亂に乗じ貨物廠に數十名襲撃せることありしも、甯流鐵條網と
齊備兵（日蘇兩軍）の爲撃退せらる。又蘇軍の兵士數名を伴ひ倉
庫を襲撃し我が方數名の損害を出せる事件あり。

第三節 第四百四十八師團の狀況

第一、開戦前の状況（作戦準備）

一、關東軍作戦計畫に於ける師團の任務

當初關東軍の作戦計畫に於ては師團は新京附近に於て輕戰の後逐次通化省梅河口附近に移動する如く定められありたり。然れども開戦直後其の計畫を變更せられ新京死守の命令を受くるに至れり。動員、編成、裝備

一、師團司令部の編成

從來新京に位置せる第一〇一警備司令部の將校下士官の大部を師團司令部要員として充用し編成せられたり。

師團長中將末光元廣は六月中旬着任す

二、七月上旬より在滿部隊の轉屬者逐次師團の基幹要員として轉入し來る。

三、動員第一日は七月二十五日、完結は八月五日なり。應召者の大部は新京地區、一部は奉天、哈爾濱等より召集せられたり。尙餘系

約七、八十名を含有せり。

4 動員完結時に於ける師團の編成、裝備の概要別表第一、第二の如し。師團定員は人員一二、〇〇〇名なり。

5 師團司令部は駐屯地司令部（舊第一〇一警備司令部）に、各部隊は勲員間並に完結後も各學校（建國大學、工業大學、法政大學、新京第一、第二中學校、白菊小學校等）に宿營せしめ編制、裝備の充實並に團結の強化を圖りたり。

別表

第一四八師團編成表

昭二〇、八、五

師團司令部										區分
勤務中隊	獸醫部長	軍醫部長	兵器部長	經理部長	高級副官		參謀	參謀長	師團長	職名
中尉	少佐	大佐	大尉	中佐	少佐	少佐	中佐	大佐	中將	階級
山口寅雄	今中貞雄	佐澤直	長(代) 澤 ?	寺内一男	高田登	岩佐善忠	丸岡茂雄	坂元呢	末光元廣	氏名
										備要
										一、師團司令部編制定員 概ね 二二〇名
										二、師團定員 人員 一三〇〇名

0056

考 備	各 部 隊									區 分	
	病馬廠	兵器勤務隊	輜重一四八	工兵一四八	砲兵一四八	挺進大隊	通信隊	歩三八五	歩三八四	歩三八三	部 隊 名
一 師團には野戰病院を有せず 二 (代)は代理を示す	中尉	大尉	少佐	少佐	中佐	大尉	少佐	少佐	少佐	大佐	階級の
	細川 ?	海田 貫一	早川 吉五郎	横田 次郎	武田 久米彦	運田 誠	有賀 正考	加賀 田 作	坂 田 英	鈴木 元親 三千	氏 名
											備
											要

0057

第一四八師團裝備の概要

種別	充足率	備	要	
人員	90%	<p>一、人員は概ね充足せり但し關東軍最後の動員にして鮮系あり、又二隻に素質劣弱なり</p> <p>二、乗馬は一部良好なるもの配當せられたり</p>	<p>相償數を各大(中)學校教練用のものより引上げ充用せり</p>	
馬匹	25%			
車輛	30%			
小銃	30%			
輕機	10%			
重機	10%			
大隊砲	5%			
火砲	20%			三八野砲級(内 10H + 15H)計(其他は哈爾濱より輸送請求中停戦となる)
通信器材	20%			電令會津より備かに一師團集せしのみ
工兵器材	20%			土工用器材若干
被服	30%			總召者入隊時の備の服裝(協和服、青年服等)相當多かりき
裝具	10%			